

結婚は昭和二十八年三月十八日です。子供は一  
姫二太郎、上から女、男、男です。孫は四人を恵  
まれております。現在は私たち老夫婦、三人の子  
供、四人の孫とすべて揃って元気です。

その後、長崎県砂採取船事業協同組合の設立に  
協力し、初代事務局長となりました。次いで軍人  
軍属恩給欠格者の組織作り運動の草分けの一人と  
して参加して、長与町支部長を引き受け、その後  
に長崎県連の事務局長となり現在に至っていま  
す。

また、昭和末期昭和六十三年頃より国会議員・  
松村謙一郎の秘書を二カ年程やりました。そして  
現在は参議院議員・松谷蒼一郎の手伝いをさせて  
貰っております。現在八十二歳です。まだまだ元  
気です。地獄の閻魔様も私の強運な人生を遮げる  
ことはできないと思っています。このような兵隊  
人生もあるのです。

調査員（村上）註、

『長田氏の兵隊人生は武運長久この上なく、目

出度し目出度し。万歳！』。

## ソ連抑留からの脱出行

### — 関東軍通信兵の苦難 —

滋賀県 平野 喜三

私が昭和十六（一九四一）年一月、通信兵とし  
て入隊するため広島県呉市の練兵場に集合して、  
私服を脱ぎ軍服に着替え、帯剣を腰にした時は、  
日本男子として国のために尽くす気概に満ち溢れ  
るものを感じました。

当時の我が家は酒類の販売を家業としており、  
家族は両親と兄、姉、私、妹、弟の七人家族であ  
りました。

私は立命館中学で柔剣道、馬術、射撃等の訓練  
を受けておりました。中学を卒業して東京の高等  
工業学校を卒業して冲電気㈱に入社し、通信機器  
の製造に携わっていましたが関係から、徴兵検査の

結果、甲種合格となり、通信兵に採用されたのだと思いました。

入隊先は満州国の新京（長春）にある部隊で、固有名は関東軍第十二特殊無線隊で、秘匿名は満州第四九四部隊でありました。大連経由で新京に到着、南嶺にある部隊に着きました。

部隊長は松岡隆少佐で工兵出身の方でした。部隊は二個中隊編成で、兵隊は三年兵が九州の炭坑夫上がりが主で、ノモンハン帰りの兵隊もおり、筆舌につくせない私的制裁に泣かされました。同年兵は皆、高等学校卒以上で理工科や通信技術者がほとんどでした。

満州第四九四部隊は関東軍の直轄部隊でした。幹部候補生は中隊からは僅か三人が選ばれ、私もその一員になりましたが、中学時代に学んだ柔道や剣道、馬術、スケート、スキー、射撃等に加えて沖電気での無線機の専門的な知識が選ばれた要因だと思えました。

奉天（瀋陽）の幹部教育隊で四カ月間の教育の

後、ハルピン研究所（通称）で情報係将校としての教育を受け、対ソ情報の収集、分析、暗号解読、白系ロシア人の教育法を学びました。その後、関東軍司令部の情報参謀部に属し単独行動に移り、服装を蒙古服に替え、満州里、ハイラル、漠河（満州国の西北端）を主な任地として方向探知器、無線機、拳銃を持って情報を収集し、参謀部の指示に従い収集情報を送付先に送付していました。

できるだけ他人の行かない所を目指して行動してきました。少尉に任官しましたが従兵は一人もおりません。あくまで単独行動ですが、国境付近に基地を設けるときは、方向探知器を設備するために天幕を設営する必要があり、最寄りの守備隊に応援を求めることがあります。それがそれ以外は単独です。

新京からの指令でソ連軍の動向、兵種、移動の方向、戦車の数等を報告するのが私の任務でした。ソ連のスパイが夜間、越境してきて牧草地帯

にサリンを散布したため、放牧の羊や馬が死んだ事がありましたので、守備隊に連絡した事がありました。また同僚の情報員が事故で死亡したので、その穴埋めに私が行ったこともありましたが、いつも危険と隣合った任務でありました。

昭和二十年八月一日付で関東軍司令部通信所に拳銃二、三丁を懐中にして転属になりましたが、満州国内の日本軍の兵備を熟知していませんと仕事にならないのでした。

八月十五日の終戦から一週間程でソ連軍が首都新京に進駐してきました。関東軍の管轄する全通信、放送施設、設備と全満州通信網は占拠、接収されました。

日本軍を武装解除し、すべての日本兵が満州から撤退するまで司令部通信所内に軟禁され、通信施設の撤収等の使役に働かされました。終日、ソ連兵の監視のもとでの生活で、九月〇日、正式にソ連極東司令官と関東軍司令官との間で降伏調印

があり、満州駐留の関東軍及び北支派遣軍の武装解除、捕虜として千人単位を一団として列車で連行、私は司令部内にいたので日本軍がソ連領内に送られていく様子とか、移動の情報（捕虜列車運行表）等、知ることができましたので、抑留の事実を知り、ソ連に対して怒りと憎しみと憤慨、やり場のない想いでいっぱいでした。

話が前後しますが、司令部で調印の時は、日本兵は全員速やかにウラジオストク港より日本に送還する、とした約束であると担当の参謀から聞かされました。（参謀の名前は大野少佐、通信参謀だと思う）

司令部の高級将校及び満州国の官僚等は、航空機でハバロスクに連行され、私の想定では満州国内からソ連に強制抑留された人員は百二十万人ぐらいになったと思っています。

満鉄所有の全貨車を動員して連日、日本兵をソ連領内へ送りこんでいた様子を見て、いかに早くから計画的に満州への進駐を準備していたかを窺

い知ることができました。

私の仕事も大分少なくなり、逃げるチャンスを探っているが監視の目が厳しく、同僚が隙を見て、脱走したが失敗、それがため監禁状態にされ、逃亡できないように私物を没収されました。

そのうち器材の引き渡しも終わり、十月末に新京から貨車に詰め込まれました。そして新京にいた三カ月間に目にしたもの、体験したこと、こんなこと、あんなこと、それを一生かかって語り継ぎたいと思いました。語り尽くせない事実Ⅱ一瞬にして崩壊した満州国、すべてがゼロになる恐ろしさ、無法、無秩序、略奪、暴行、殺人、飢餓、人間の生き地獄など。国民にとって二度と戦争は絶対にしてはいけない。満州国の最期がそれを物語っています。

五年間いた新京で親切にしてくれた中国人、韓国の人、蒙古人などと、たくさんの友人と、戦争に負けた恥ずかしさ等々複雑な想いを秘めなが

ら、身動きできない貨車に載せられ一週間かかってやっと着いたところは、ハバロフスク捕虜収容所でした。

既に司令官、参謀長、各部隊長や満州国の高級要人がいました。私の収容された収容所では、憲兵、警察官、満州国官吏、特務機関員、情報員等さまざまな集まりでした。皆で三百人近くいました。

早速、あくる日から一人ずつ取り調べと、聞き取り調査があり、あまりにも日本のこと日本軍、関東軍のことを知っているのに驚きました。その中でもう一つ驚いたことは、先に捕虜になった日本軍の上級将校や要人が脅されてしゃべっていたことが判り啞然としました。それがため、隠していたことが、ばれて制裁を受けた者がいました。戦争プロの職業軍人が戦争で負けたとたん自分だけのことしか考えない、兵隊を見捨て邦人を見殺しにして頼り見ない責任感のないあきれ果てた軍人の姿を見ました。

軍人の仕掛けたこの戦争、皇軍の誇れる関東軍が一夜にして崩壊、在満一般邦人、開拓団の老人、婦女子が軍隊をたよりに助けを求めているにも拘らず、なんら手を差し伸べることもなく見捨てた関東軍。満州の大地で犠牲になった人々は一生恨んでいることでしょう。

さてハバロフスク収容所での取り調べも終わり、連れて行かれた所は赤軍の上級将校のいる部屋でした。四々五分、意味がわからないまま、最後に通訳を通じて、ソ連軍に不利益を与えた、よって強制労働を言い渡されました。全く一方的で文句を言ったら、命は惜しくないのかと脅されて泣き寝入りで部屋を出て、悔しくて涙がとめどもなくとまらなかつた。あらためて戦争に負け、無条件降伏の悲惨な情けなさを十二分に味わいました。

十一月に入るとシベリア独特の灰色の寒さを感じさせる嫌な日々でした。囚人扱いされ、いつま

でソ連に抑留されるのか、思っただけでも気が狂いそうになる。日本のことや家族のことや様々なことが走馬灯のように駆け巡り、このシベリアで死んでたまるか、必ず生きて帰りたい。脱獄、脱走してでも日本に帰る決心をしました。

いよいよ強制労働連行の日が来ました。名前を讀み上げられ、前に出て整列し、百人が一团となり、三団三百人が編成されました。ソ連の監視兵は一团に二十人（一般捕虜輸送の監視兵は百人で二、三人）で十倍の数である。連行される人たちは自分も含め不運な連中で、いずれ一緒に起居を共にすれば、どのような理由で連行されることが解ると思う。

早速五十人ずつ家畜用の貨車に詰め込まれ、牛糞の異様な悪臭の中で、開けっ放しの貨車は寒くて、じっとしていられない。毛布をかぶると、臭くてたまらない。

いよいよ我らを重犯罪者として扱いをするのかと悲憤慷慨したが、中には黙り込んでいる者、気

の狂ったように独り言をいっている者、とにかく地獄の貨車に揺れ、トイレに悩まされ、三日目に着いたところがウオロシロフでありました。通訳にこれからどこに行くのか聞いても、判らない、知らないの一点ばり、聞く度に腹が立ちました。

駅前広場にトラックが待っていて、それぞれ三十人ずつ分乗して夕暮れの寂れた町並みを通り抜け、遠くに見える山に向かって走り続け、真っ暗になったから多分一時間半位走ったと思います。

いつか機会があったら脱走するつもりでいるので、回りの地形や特徴になる風景や、部落の位置をしつかり頭に叩き込んだものです。

ウオロシロフの駅から五十キロ位でトラックから降りた所は山の中で、真っ暗な鬱蒼と茂ったところで、大木、山林伐採の強制労働をやらされることを知りました。これは大変なことになると予感しつつ三十分ほど歩いたら前方に灯かりが見えました。ここがこれから生死の別れ目になる収容所とは誰も予測しないでしょうが、遂にそこに到

着しました。

建物の前に立ち暗闇の中から、じつくり見て驚きました。窓がほとんど無く、製材した残りの木端で作った掘立小屋が我々の住み家でした。薄暗いランプの光でよく見ると、地面を三メートル位掘って建てた山小屋が五棟あり、三棟に百人ずつ別れて分宿することになりました。

食事はどうするのだ？ と思っていたらソ連兵がロシアパンを一個ずつ渡して、今夜はそれだけと言われてガックリ。スープも副食もない。いよいよ栄養失調で抹殺されるのかと思う。他の人たちは何を考えているのだろうか。

あちこちから集まってきた者同士、自己紹介して自分の居場所、寝る場所を作り、いつまでいるのか分からないこの山小屋で収容所生活が始まりました。

周囲の五、六人がパンを噛りながら、なんともやるせない不安の会話。なんとかして救う道はないのか、我々は国のためにやってきたのに、こん

な目に会うなんて口惜しい、誰が救ってくれるのか、神か、仏か、国はなにもしてくれない。そんな話を耳にしながら初めての夢を結びました。

あくる朝六時に起こされる。各班別に食事班、作業班、整理班等集団生活に必要な管理を決める。皆、軍隊経験があり、やりやすい。それぞれの階級があっても人間平等の精神でやろうと決まりました。

朝食が終わってから収容所長からの伝達で「この収容所より脱走した者は銃殺に処す。脱走を企てた者及び手助けした者は一カ月の重労働を科す」とあり、暗い気持ちになりました。

これから毎日の作業日程が決まり、伐採場所は直径五〇センチ以上のアラスカ檜が鬱蒼と繁り、日中でも日の当たらない暗い山です。持ったことのない二人引きの鋸や恐ろしいほど大きな斧、なた、ロープと雑のう、飯盒を持って山に入ります。

毎日の作業の中で、直径五〇センチ以上の木を一本半から二本がノルマで、一日三〇〇グラムの黒パンが与えられる。これにスープ（お湯に動物油が浮いている程度）それにジャガイモの副食です。

収容所に入ってから三週間位は、いくらか体力がありました。十一月の末ぐらいからシラミと水による下痢（腸炎）、寒さによる風邪から肺炎のため収容所内でパニックが始まってきました。ついに十二月に入って死者ができました。収容所には女医が一人いましたが薬がないからただ死者の検死をするだけです。

十二月末くらいから急速に栄養失調からくる諸病併発し毎日死亡者が五体から八体、多い時は十体以上あったことがあります。

収容所長に抗議しましたが聞き入れないし、ここに収容された者は覚悟のうえのような冷たい言葉しか返ってこない。気力もなく、子供のこと、妻のこと、母親、父親のこと、兄弟のこと、食べ

ることなど、昔の思ひ出話をしながら事切れて死んで行く姿を見て、こんなことがあっていいものかと、明日は我が身と苦悶しながら体力に限界を知りつつ、脱走のチャンスを探い準備を進めていました。

一月に入って寒さは一段と厳しくマイナス三十度位になり、朝になると遺体運搬の使役に招集され、スコップを持って馬ソリと一緒に行く姿を眺め、手を合わせ冥福を祈りました。異国の地で果たした戦友よ、俺はきつと帰って見せると固い決意を心に誓いました。

或る日、山で作業をしていたらダダダダダダとマンドリン機銃の銃声が聞こえたので行って見たら日本兵が死んでいる。よく見るとズボンを半分下げているところを見ると、腹をこわして野糞（下痢）をしているところを監視兵が脱走兵と勘違いして撃つたとのことであった。平気でこんなことをやるソ連兵に怒りを覚えました。もう既

に百人以上も死んだことで収容所内に、このまま犬死するよりも脱走しようとする相談があちらこちらで話題になっていました。

しかしソ連領内での脱走は、ほとんど不可能に近いと思われる。なぜなら、この地点からソ連国境を経て中国国境まで約三百キロあり、安全な地域（新京）まで千二百キロある。収容所を脱出したとしてもソ連領内での逃亡は難しい。自分の体力の限界（七〇キロが今は四〇キロ）もあり、体力のあるうちに実行しようと準備をしてきました。

ソ連領内での服装、脱出時の工具、塩、空き缶、ナイフ、タオル等最小限の身軽な携行品にして、その都度現地調達で逃避しようと計画、国境まで七日間、中国領の綏芬河↓東寧↓牡丹江、ハルピン↓新京三十日ぐらいで行ければと計画、実行は二月初めとしチャンスを待っていました。

一月末、いつものように作業に追い立てられて



伐採現場に行き、枝集めをしていた横で、ナタで枝払いをしていた同僚が誤って手元がすべり脚に深い傷を負いました。監視兵に連絡したら医者と呼びに行けと言われて山の麓にある収容所の医務室の医者、すぐ山に行ってほしいと伝え、また山に戻ろうと思って周囲を見まわすと監視所にソ連兵、いない。

チャンスは今と急いで自分の部屋に入り、前から用意していた脱走用の荷物を持って収容所を脱出、できるだけ遠くへと一生懸命に歩き、だれ一人とも会わなかったのが幸い、夜になってやっと落ち着き、ロシア服に着替え、作業服を捨て、星をたよりに国境に向かって歩き始めました。

無事脱出できたけれども、後を追ってくるのではないかと八方気を配りながら、部落を避け南東に向かって歩きました。

脱出第一夜は夢中で歩き続け、ようやく東の空が明るくなって来たら一晩中歩き続けた疲労と空腹とで目まいがして動けなくなり、廻りを見たら

半分壊れた野小屋を見つけ休むことにしました。が、見付かつては大変と横になっても眠れない。今まで孤独な生活には慣れていましたが、敵国内での逃亡は精神的にも肉体的にも生命の極限を感じました。

脱走は十日間の苦渋の末、成功し、中国の綏芬河に到着できました。その後、ハルピンから新京へと行き難民収容所に入りました。